

解雇撤回させた労働者・市民の団結！

「天下の太平洋セメント」動かし和解勝ち取る

「労働者は虫けらやない！」「会社の都合で放り出すな！」「と労働者・市民が力を合わせて闘っていた区内の労働争議（昨年十二月号既報）が勝利的に解決したことが読者からの一報で分かりました。太平洋セメント株（本社・東京）関連の生コン輸送会社である株高洋（港区福崎）が昨年一月に「会社を閉鎖する」と通知したことに対し、「そんなことされたら生活が壊れる」「会社をなくさず雇い続けてほしい」と最後まで応じなかった従業員一人を、付き合っている地域の人々や労働者が「これは働く者みんなの問題や」と励まし続け、「会社存続」と「雇用確保」こそできなかったものの、このほど「解雇撤回」と「謝罪」を勝ち取り、「和解」に至ったものです。

「生活と権利」掲げ、対等の立場で粘りの交渉

◆「解雇通知」認めず

「この株高洋は、太平洋セメント株の子会社で

ある関西小野田レミコン株（高洋と同所）が百

万円出資して設立した会社で、生コン輸送を担っ

てきました。これまでも実質的な人減らしは
徐々に行なわれ、相次ぐ「合理化」と出荷減に

よつて、十年前に二十数人いた本工が次々と「日々雇用」と呼ぶ非正規に置き換えられ、昨年には五人となっていました。その一月に会社側は「会社を清算し、営業を譲渡する」と提示。それに対してセメント関連の労働組合の組合員だった五人は「会社も雇用も続けてほしい」と求めて団体交渉を積み重ねてきました。が、八カ月を経た十月、うち三人が退職金などの条件を飲んで退職に応じたことから、会社側は残る二人、竹下良二さん（しげふみ）と松田一紀さん（かつのり）（五〇〇田中在住）の「十一月解雇」によつて当初の目的（会社清算・営業譲渡）を遂げる方針を打ち出してきました。

◆「守る会」を結成

「これは本人の合意がない解雇やないか」と反発した一人は、これまで付き合ひのあった労働者や地域の人々に実態を訴えました。これに添えて十月三十一日「高洋関連で働く仲間たちを守る会」が結成されたのです。同会はただちに役員体制や年会費などを決め、翌十一月二日から会員の拡大や会社への申し入れを開始。それでも会社側は「組合」とは話がついていない「予

「働く者の生活と権利を守るため、親会社太平洋セメントの横暴と闘い抜く」と「守る会」の抗議集会で決意を示す竹下良二さん④と松田一紀さん⑤。十一月十八日、福岡の株高洋で



定通り十一月十五日に解雇する」とこの態度を崩しませんでした。

◆「決起集会」で勇気づけ

そこで同会は十一月七日、仲裁機関である大

阪府労働委員会へ「あつせん」を求める一方、十一月十二日夜には生「シ」工場内で「決起集会」を開催。厳寒について百八十人が集まり、プラントの巨大なタンクに、この日までの会員約二百人の名簿を貼り出しました。「これに勇気づけられた一人はあつせんまで解雇は口延べや」と就労を続ける決意を固めたといっています。

◆「要請はがき」千通で圧力

その後、同会の呼びかけで、「雇用のルールを守れ」などと求める「要請はがき」が会員の手で約千通、親会社の太平洋セメントへ送られました。そして、十一月二十日には府労委あつせん、同十七日には親会社の太平洋セメントへ申し入れ、十一月一日には会社に団交申し入れ、同三日には第二回府労委あつせん、同十一日には再度太平洋セメントへ申し入れ、同十八日には第二回府労委あつせんなどを経て、以降も団交などを重ねました。が、この中で会社側から二人と合意の上で解決したい。協議は続ける（同四日、社長）「雇用確保は困難だが解決の道は探りたい」（同十二日、太平洋セメント業務課長）「解雇通知は撤回、協議は続ける」（同

十八日、府労委あつせんとの意向が表明されるなど、一定の前進が見られたものの、「雇用確保」の回答は得られませんでした。

◆年末年始も「集云」で激励

そうして二〇一三年も押し詰まった十二月十八日、再び工場内で「集云」が開かれ、駆け付けた八十人が二人を励ましました。しかし年明けの一月十四日、会社は「二月十五日に解雇する」と通告。二人は「認められない」と抗議。翌日、会社は「退職金などを記載した解雇辞令」を突き付け、これに対して同会はその夜、二たび工場内で「集云」を開催して「解雇撤回要求」を決議。翌十八日には会社側に「抗議と撤回要求」の申し入れを行いました。

◆遂に「籠城作戦」敢行

こうして闘争が双方にとって正念場を迎えた同日、会社側はセキユリシステムを替えるという物理的手段を講じてきました。が、二人もその夜から組合事務所確保のため「籠城^{ウチコロ}」を開始、組合の仲間も交代で泊まり込みに参加しました。これを見た太平洋セメントは、自ら設けたセキユリティを越えて担当者が乗り込み

執拗な個別説得を試みるようになりました。同会によろし、その姿は「譲渡日程に迫られる中で、ブリック企業との嫌疑は何としても避けたい会社側の慌てぶりを示すもの」であると同時に「解決を迫られる担当者の必死の誠意の表われ」のようにも見えたといっています。

◆新組合結成、解雇撤回へ

あくまで解雇撤回を求め就労を続ける二人と同会はさらに交渉を重ねながら、その一方で、「既に組合と会社との間で協定が成立しているのなら、それを盾^{たて}にされることは避けた方が良い」との判断から、二人はその組合を抜け、「高洋関シニ関連労働組合」を結成しました。そして二月二十四日、この新組合との団体交渉で、高洋・関シニ両社は「解雇を撤回し、謝罪する」ことを明確に表明したのです。その上で同会は「譲渡」によって二月以降は高洋がなくなるとを見越して「和解」交渉に切り替えることを確認。さらに数回の交渉を重ねた結果、「高洋はなくなるが関シニについて日々雇用できるよさ全力を尽くす」「関シニ社」との約束も引き出し、両社と労働組合の二人が「二月三十一日付退職

と退職条件に同意した」との協定に調印、解決に至ったのでした。

◆「仲間についていなめ」

ほぼ一年に亘る^{わた}苛烈な闘争を闘い抜いた二人は、支援の仲間への感謝と共に、大要次のような感想を語っています。

「二十歳から生コン労働^{たすく}に携わって三十二年。出荷減に伴う合理化に継ぐ合理化で最後に残ったのは一人でしたが、この闘争の中で、労働組合とは、会社とは、人間とは一を改めて考えることができました。その答えはこれからの人生で出てくると思います」(竹下さん)

「これまで経験のない闘いの中で、何度も心が折れかけた時がありましたが、悔いなく闘い抜くことができました。改めて『仲間についていなめ』『人に支えられて幸せだなめ』と思っています。これを教訓にこれからの人生も人間らしく生きていこうと思います」(松田さん)

また一人の家族も大要次のような感想を語っています。

「解決へと導いて下さった守る会をはじめ、支援くださった皆様へ、家族とでも深く感

「敵寒をついて二人はみんなのために」「みんなは一人のために」と「守る会」の抗議集会に集まった人々。二月十八日夜、(株)高洋で



謝申し上げます。本当にありがとうございます。た(竹下夫人・悦子さん)

「十三年前に高洋社員となった夫を通じて労働組合というものを知り、この闘争の中でも心が折れそうな時に支えてもらったのが組合や守る会の人たちの温かさでした。多くの皆さんの「つながりと団結」に心から感謝しています」
(松田夫人・美由紀さん)

◆「大企業の横暴を規制する闘い」

今回、ごく小さな生コン会社である(株)高洋が強行しようとした企業閉鎖・営業譲渡・全員解雇は、詰まるどころ、親会社である太平洋セメント(株)の「合理化」の一環です。「合理化」そのものが悪い訳ではありませんが、会社を支えて懸命に働いてきた労働者を犠牲にして行なわれるところに問題があると思われます。

同社は一八八一(明治十四)年設立。セメントをはじめ、資源、環境、建材・建築土木、セラミックス・エレクトロニクスなど広範な事業を手がけ、資本金は八六億円、従業員は一六四五名。生産拠点は国内九、海外十(グループ含む)。二〇二三年三期末決算での連結売上高は

七四七六億円で前期比一九七億円増、営業利益は四〇八億円で前期比二一四億円増、株主等への配当は四九億円を超えています。

「たの会」(最終会員数四四九)の太田稔会長は「太平洋セメントのこうした莫大な利益はリストアップによって得られたことが明らかになっています。大企業がため込んだ膨大な内部留保を、働く者の雇用確保や賃金引き上げに回し、安心して生活できる職場環境を確保させることが国民的な課題になっている今、二人の雇用と生活を守る闘いは、大企業の横暴を規制し、企業としての社会的責任を果たさせるという重要な役割も担いました」(今回、会社存続と雇用確保こそ実現できませんでしたが、守る会は闘いの中で竹下・松田両家族を精神的に支え、闘いの母体となり、三度の決起集会を成功させ、会員を拡大しました。会社が恐れたのはこの地域の人たちへの闘いの広がりで、その力が対等の立場での交渉と謝罪を引き出したのだと思います。これを大切な教訓として、会の解散後もそれぞれが新たな一歩を踏み出すことを期待しています」と話していました。

あさやけ

「複合汚染」ならぬ「複合疾病」に悩まされました。三月中旬のことです。二十年来の花粉症に持病の片頭痛、加えて春風邪と正に踏んだり蹴ったり。特に風邪から来る強烈な吐き気には辟易し、予定していた取材も、楽しみにしていた家族行楽も中止にいたしました。冷水摩擦や筋トシなどで体調管理には気を配っている方ですが、さすがにこの時はかりは健康のありがたみが身に染み、体さえ元氣なら何でもやっただけの「の気持ち」もさらに弾まった次第です。

▼ところで健康といえば、日本が誇る「国民皆保険制度」がTOPPによって崩れることが心配されています。もし現実となれば「経済格差による医療格差が米国並みになり、貧乏人は死ぬ」という事態が起き兼ねない」と多くの医師や学者が警告しています▼因みに冒頭の「複合汚染」とは一九七四年、朝日新聞に連載された有吉佐和子さんの長編小説で、「複数の汚染物質が混ざりあうことによって、個々の汚染物質が

単独に与える被害の質・量の総和を超える相乗的な汚染効果が表われる「ウィキペディア」を意味します▼同様に、専ら産業や経済への影響はかりが注目されるTOPPですが、怖いのはそれを通じて日本の政治文化・環境、さらには人心までもが米国基準で複合的・相乗的に損なわれること。そうならないよう、そこそ国民各層の「複合的」な運動でTOPPそのものを葬り去るつと心ある人たちは呼びかけています▼とまあ、それには期待も持てますが、筆者の複合疾病（花粉症と片頭痛）とは死ぬまで付き合わなければならないでしょうか、トホ。

× × × × × ×

「三・五選」といつ空前の低投票率が話題になった出直し市長選。「選挙を余りにも手前勝手に利用したことへの市民の反発の表われ」とされています。また、余りにひどい「一票の格差」に裁判所から「無効です、やり直さなさい」と宣告された選挙区もありました。そんなこんなで「選挙」というものへの国民の信頼がみるみる崩壊しています▼口へ「当選者以外への票が全部死んでしまふ小選挙区」といつ制度そのものが問

題や「区内商店主」「真剣に考えて投票する人」とそうでない人との意識の格差も深刻やわ「区内女性」といつわけです。加えて筆者が問いたいのは果たして選挙で世の中が良くなるのかという問題▼もしそれが本当なら、少なくとも全ての成年男女が参加可能になった一九四六年総選挙からいつち、日本はもつと心豊かな国になっているはず。が、現実はまだ逆。特に戦前戦中を生き抜いてこられた高齢者には「初めて投票した日の期待感」(八十年代女性)と「今の政治の無節操」(九十年代男性)との懸隔がまるで悪夢のようにささ映っているのではないでしょうか▼聖書には「人が人を支配してこれに害を及ぼした」「伝道」「地の人の道はその人に属していない」「エノク」「ヤ」とあり、「全ての道において神を認めよ」「歳」と呼びかけています。文明発生から数千年、奴隸制・封建制・資本主義・社会主義とあらゆる政治形態を試みてきた人類は今こそ、その支配・被支配の悪の連鎖に終止符を打つため、「選挙」「民主主義」さらには「進化論」を含む全ての価値観を根底から検証すべきだと考えますが、読者諸賢の「所懐や如何に」。

叫んでいいよー！

今月の提言者

森友 建さん（タム）



「ICT教育」全面化を前に

今更な復権を

大阪市は、二十七年度後半からの小中学校教育ICT（情報通信技術）化全面実施を決め、デジタル教科書、電子黒板、タブレット（板状の携帯コンピュータ）の三点セットを使った授

業が始まる。現在、実験校でICT教育を推進し、データ収集を行い、教師がICT教育スキルを確保するための研修も急ピッチで行われている。地方都市では、すでにICT教育を全面的にスタートさせているところもある。海外では、シンガポールや韓国など、実験的にエリアを絞り、本格的にICT教育運用を行っている事例もある。しかし、大阪市のような大都市でのICT教育全面運用は前例がない。

教師の同教育展開スキルが十分確保できるのか、子供たちが同教育にうまく順応できるのか、デジタル教科書の内容が水準に達しているのかなどの課題も指摘されている。指導する側、指導される側ともに簡単に答えを求めるために、合理性・効率性を追求する傾向の強まりが予想される。子供たちの思考力・創造力の減退と基礎学力の低下が懸念される所以である。

◆デジタルの「危うさ」識者も指摘

今や、社会は機械化が進みデジタル化の時代となり、効率本位のIT時代と変化した。そこには究極のアナログ道義であるが、デジタル機器に囲まれる環境の中で、自分の生活空間の

どこかにアナログをキープしておくことは非常に大事だと、デジタルの危うさに言及し、デジタルとアナログのバランスをうまく確保せよと問題提起をする識者もいる。

建築家の安藤忠雄さんは、「コンピュータ社会は人間が進むべき方向ではない。IT革命は人類にとっては後退。コンピュータを役立てるには、自分の能力がある。自分の思考、表現と判断力で自分の世界を作るために、読み書きそろばんが大事だ」と書く。

田原総一郎さんは、「デジタルの特性の一つは、他者との関わりを持たなくても自己完結してしまふことだ。教科書のデジタル化は子供たちから議論とコミュニケーションを奪う恐れが強い」と警告し、人材育成の難しさを語っている。

工業デザイナーの水戸岡鋭治さんは、「現代はデジタルの時代だが、世の中は仮想（バーチャル）ではなくリアルに動いている。従って五感を使つてものを考える、即ちアナログ的な思考の訓練が必要である。日本人のDNAを大事にし、効率（デジタル）ではなく日本の文化を大切にしなければならぬ」と発言してい

る。

◆人間力高まるそばに注目

一方、数年前からそばん学習者がふえてきた。その理由は、そばんを使って算数の基礎的な部分を学ぶ楽しさ、分かりやすさが評価されたこと、そばん学習が基礎学力と人間力養成に有効であるからだと思われる。また、そばん式暗算能力に対する世間の注目が増してきたことも理由の一つだ。

「コンピュータの普及とその使用からはいろいろの弊害・問題点が生じると言われて久しい。反面、そばんは人間の基本的能力を磨き身に付けていく技術であり、トレーニングの過程で得られる忍耐力・向上心などは、正に教育の基礎・基本でもあり、機械化の弊害を薄める効果も期待されている。

最近の研究では、そばん学習で脳機能が活性化されるのが明らかになってきた。特に、^{ばね}前頭前野が発達するにつれて、子供たちの情緒が安定し、学習意欲が向上するといっているデータが得られたことは、そばん教育強化のエビデンス（根拠）になるかもしれない。今後、基礎学力

を向上させ、人間力を高めていく過程で、そばん学習の重要性はますます高まっていこうと思われ、そばん指導の強化を望む声はもっと大きくなるであろう。今こそ、そばん塾がそのアナログ的特性を生かし、人造りに貢献すべき時であるのかも知れない。

◆真の教育とは何か

経済同友会代表幹事の長谷川閑史^{ひさし}さんは、「能力に応じて結果が出せる人、或いは選ばれたエリートには徹底した競争をさせる場を設けることが必要だ」と、人材育成の要諦^{ようてい}を語っている。正に、そばん塾が持つ特性そのものを評価している感がある。

パーソン・オブ・ザ・センチュリー（二十世紀一〇〇年を代表する人）に選ばれたアインシュタイン博士は真の教育とは何かについて次のように発言している。「真の教育とは、学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に、なお自分の中に残るものをいこと。長期間のそばん学習で身につけ^{つか}つものは、体の深い底の方に蓄積され、彼の言う真の教育で身につくものと同じ質であると思われる。ゆえに、そば

ん教育は真の教育の一つなのかもしれない。

そばんを習う若い人たちは、日本の財産であり、有為^{ゆうい}の人材の集団である。彼らが世界の評価に耐えうる日本の国づくりに直接参加する気概を持ち、学問・そばん・スポーツに打ち込んでもらいたい。



編集部より この提言は、去る二月二十二日

に大阪商工会議所国際ホール（中央区本町橋）で開かれた二〇二三年度珠算優良生徒表彰式典・ジュニア奨励賞授与式（大阪珠算協会と大阪商工会議所が共催）で森友建・大阪珠算協会会長が述べられた主催者あいさつの内容を元に新たに書き下ろされたものです。

森友建さんプロフィール 昭和十二年港区生まれ。

小学四年から珠算を習う。北野高、甲南大卒。同二十三年「森友綜合教室」（夕凧一・二・七、TEL・FAX六五七二一六八七七）開設。日本珠算連盟理事長などを経て現在、一般社団法人大阪珠算協会会長、近畿珠算強化連合会代表、ブログ「世界に広がるそばん文化」。ホームページは森友綜合教室で検索可。

運動の力で賃上げを！

春闘で官民労働者が連帯集会

「労働運動の力で賃上げを勝ち取ろう！」と

三月十四日夕方、入舟公園（八幡屋）で「二四春闘勝利！官民連帯総決起集会」が開かれました。



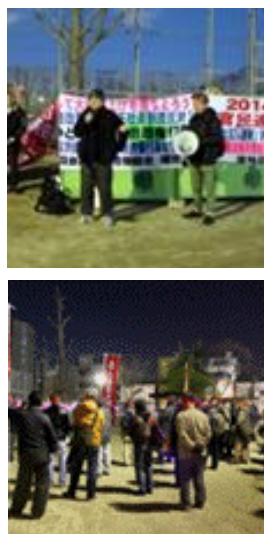
「労働運動の力で賃上げを勝ち取ろう！」とシ
ュプレヒコールをあげながらみなと通を行進
する官民連帯集会の参加者＝三月十四日夕方

約百五十人の労働者が参加。集会後、磯路中央公園まで「デモ行進」しました。主催は「港地区平和人権連帯会議」。中小零細企業の労働組合と公務員の労働組合が官と民の垣根をこえて力を合わせ、生活と権利と平和を守るために活動してきた団体です。

集会では中村吉政（よしみ）議長が「安倍首相が要請して賃上げ回答が出されるといっのは違和感がある。しかも一部大手企業の正社員の話で中小零細や非正規の労働者には及ばない。むしろ消費増税で物価が上がって賃下げだ。労働者が労働組合に結集して闘い、賃上げと権利を勝ち取ろう」「出直し市長選に大義はない。大阪市の労働組合つづしに七件の労働委員会命令が出され、市の違法性がどんどん明らかになっている。命令履行を求めている」となどと訴えました。

連帯の挨拶に立った南大阪平和人権連帯会議の山元議長やユニオンネットワークの垣沼代表、おくの市会議員事務所からは、「格差と貧困拡大、大企業優遇、原発推進、戦争と改憲の安倍政治」や「労働者敵視の橋下市政」に厳しい批判と反撃への決意が述べられました。

「熱気に溢れた入舟公園①」と磯路中央公園②



その他の組合や団体からも、「労働組合の存在意義が問われている。ストライキで賃上げを勝ち取ろう」「国会に出されている派遣法改悪案は労働者に〈生涯派遣〉を強いるもの。許してはならない」「秘密保護法強行採決、沖縄・辺野古基地建設、集団的自衛権容認、原発再稼働・輸出など、日本は戦争に向かっている。秘密保護法は廃止しかない」「大阪都構想は市民の利益を『守らない』などの訴えが次々と行なわれました。

「デモ行進では大幅賃上げを勝ち取るぞ！」「春闘勝利！」「格差と貧困をなくせ！」「生涯派遣は、免だ！」「原発再稼働をやめろ！」「大阪市は不当労働行為をやめろ！」「秘密保護法廃止！」「集団的自衛権容認反対！」などのシュプレヒコールで道行く市民に訴えました。

消費増税なんでやねん！

中小零細業者が集団申告



→ 激しい雨をつき「消費増税なんでやねん！」と
シュプレヒコールをあげながら港税務署へ向
かう港区の中小零細業者 三月十三日午後

「消費増税なんでやねん！」。不況で重税に苦しい港区の業者が怒りの声をあげました。

確定申告期間（三月十七日～三月十七日）の最終日を前にした三月十二日午後、港区の中小零細業者の集まりである「港民主商工会」がこの時期恒例の「重税反対全国統一行動」を開催。激しい雨の中で百人超が参加し、港区民センターでの集会のあと港税務署に向かってデモ行進、集団で申告書を提出しました。

◆増税中止の運動を呼びかけ

集会では重森拓也会長（港晴で家電販売、電気工事業、六十一歳）が主催者を代表してあいさつ。その中で同会長は「消費税が実施されて以来、国民から一六四兆円が徴収されたのに対して法人税減税は、四八兆円。つまり我々から取った税金が大企業の金庫に入る仕組み。貧乏な庶民がなんで大企業の懐を温めんとアカンのか。去年、復興特別法人税と同時に法人税の五割減税が実施されたが、復興特別税は一年前倒して廃止するので法人減税だけ残り、また

もや大企業の内部留保は増え、今や二七〇兆円超。内部留保は使い道のない死んだ金。これを

社会へ還元させないと景気は良くなりません。しかも成長率はアベノミクス出発時を頂点に下が

り続け、今ではマイナス寸前。こんな時に増税するのは狂気の沙汰。物がさらに売れなくなり、企業の業績は悪化し、税収が減り、国家財政は危機に陥り、またもや消費増税と悪魔のサイクルが繰り返され、結局は国民生活が破綻して国がつぶれる。『税と社会保障一体改革法』の付則（一八条）項では『経済状況等を勘案した上でその施行の停止をきめ所要の措置を講ずる』とあり、その通りにするなら直ちに増税は中止すべきだ。民商の全国組織である全商連は『増税中止のため列島騒然の闘いをしよう』と署名運動を呼びかけている。最後まであきらめずがんばろう！』と呼びかけました。

◆申告書を一齐に提出

集会終了後、デモ行進に移り、激しさを増した雨の中、参加者は「消費増税なんでやねん！」「社会保障改悪なんでやねん！」「大企業だけ儲けて庶民は貧乏なんでやねん！」などと連呼。港税務署（磯路）前では重森会長が「要領書」を読み上げ、そのあと一齐に申告書を提出しました。

身近に楽しく温かく

賑わった「ふれあい福祉のひろば」



→「福祉を身近に」と催され、賑わった「みなとふれあい福祉のひろば」は三月一日、港区民センター（写真は小規模作業所のバザーコーナー）

「楽しみながら福祉を身近に考えよう」と三月一日（土）、港区民センターで「みなとふれあい福祉のひろば」が開催されました。区内の諸団体から成る実行委員会の主催で八回目。十時から十五時まで、工夫を凝らした楽しく温かな内容に来場者の笑顔が溢れました。

◆舞台に拍手、展示に人だかり

舞台上では港中学校吹奏楽部の演奏を皮切りに、障害者施設の和太鼓演奏や創作ダンス、手話サークルの手話劇、デイサービスセンターの歌、そのほか様々なグループによるエイサー、社交ダンス、歌体操などが次々と登場し、最後は全員参加の河内音頭で盛り上がりました。どの出し物にも盛んな拍手と声援が送られました。

またホールやロビーでは高齢者や障害者の作品バザー、高齢者デイセンターの作品展示、手話サークルによる手話指導、図書館による本のバザール、そのほか様々な団体による遊びや飲食のコーナーに人だかりができていました。

◆「とても温かな催し」

来場者のうち「くしゃきょん」港区社会福祉協議会のマスコミリキヤフクターとのじゃん

「元気な動きで会場を圧倒したエイサー」と、交流が盛んだった小規模作業所バザー①



けん大会で優勝し、「くしゃきょん人形」をプレゼントされ喜んでいた北村あいさん（七五）三先在住は「足の不自由な弟さんを持つ友人に誘われて初めて参加しました。高齢者デイセンターの作品はどれも立派でびっくりしました。楽しみながら障害者福祉について学べる、とても素敵な催しだと思います」と話していました。

◆「手話歌のぼん」の場と「くしゃきょん」の男性

また、手話者と一緒に「食べ物コーナー」でカレーを食べていた「くしゃきょん」の河野隆一さん（六〇）生野区在住は「週四日、波除の『手と手とハウス』（NPO法人大阪府三つ煮友の会）が運営する施設に通っています。この催しに

参加するのは「回目」、去年は「じ」で手話を覚えたので、今年も新しいのを覚えて帰るって目標を持って来ました。子供の頃から微妙な音が聴き取りにくく、目も悪かったのですが、十五年ほど前からさらに悪くなり、(視野に白い膜がかかったようです。八十を超えた母と二人暮らしで、自分では少し料理もできるのに、『危ない』とやらせてくれない母を邪魔に思う(笑)時もあります。地震や津波など心配事はたくさんありますが、先のことはあまり考えず、その日の日を元気に過さうと心がけています。」

その横で手引き者の佐藤祐子さん（つひこ）＝中央区在住＝は「手と手とハウスで十年ほど手引き者をしています。私も二回目の参加ですが、色々な「ナーを通じて障害者と健常者がふれあえる、本当に温かな催しですね」と話していました。

◆「色々な支援制度知った」と視覚障害女性

また、ヘルパーと一緒に「喫茶「コーナー」で珈琲を飲んでいた視覚障害の四十代女性＝南市岡在住＝は「初めて参加しましたが、楽しい催しで驚きました。もともと弱視でしたが、一年半ほど前から悪化しました。友だちに教えてもら

←高齢者デイセンターの作品に感心する来場者

①と、活気があった風船アートコーナー②



って役所へ行き、色々な支援制度があることを知り、今は週一回、鶴見区の『日本フットハウス』(視覚障害者のための総合福祉施設)に通い、点字の勉強、音読パソコンの練習などをしていきます。家では近くに住む母が色々と面倒みてくれますが、障害に対して思春期の子供二人が理解してくれないのが辛い（つひこ）です。市岡元町や弁天町駅前の交差点で信号の音楽が車の騒音で聴こえないなど、障害がひどくなって分かったことが色々あり、役所は日常生活のそういう点を弱者の立場で細かくチェックしてほしいと願っています。その横でヘルパーの浅野廣子さん（ひろこ）(港アイサービラさんぽ)は「彼女は「彼女

の例でも分かるように、障害者が安心して暮らせるために、支援制度のもとと積極的な広報が必要だと思っています」と話していました。

◆小規模作業所が連携

なお、実行委員会メンバーでもある港区障害者施設連絡会(愛称「ポートネット」)は、港区内にある心身に障害を持つ人たちの働く場・社会参加の場である小規模作業所の集まり。二〇〇三年三月の「第一回みなと福祉のひろば」(みなとふれあい福祉のひろば)の前身をきっかけに生まれました。現在、あゆみ作業所、グリーンス、グリーンズⅡ、マーガレット工房、ふらつと、港ひかり作業所、ワークみなと、ゆうゆう美波途（みなと）、手と手とハウス、ナポレオンフィッシュの十作業所と障がい児学童保育所「かもめクラブ」が加入。「障害を持つ人たちが、住み慣れた地域で安心して暮らしていけるように」と連携し、また独自商品の製作・販売や下請け作業の受注など、様々な工夫を重ねながら活動を続けています。問い合わせはワークみなと(夕風 ☎六五七一・七五二一、FAX六五五八・九〇二一)まで。

猫ふやらず共存を！

フリマで「町猫」よびかけ



→「野良猫をふやさず、地域で共存できるよう行動しよう」と呼びかけ、多くの協力者で賑わった「町猫フリマ」＝三月二十三日、築港四丁目

「野良猫をふやさず、地域で共存できるよう行動しよう」と呼びかけるフリーマーケットが三月二十三日に築港で開かれ、賑わいました。

呼びかけたのは、築港在住の西浦雅子さんと、天保山公園で「公園ねこサポーター」「野良猫をふやさないよう適切な餌やりや避妊・去勢手術を行なう市公認ボランティア」として活動する尾崎キヌ子さん(池島)。昨年末、二人の声かけで、野良猫保護を続けてきた個人が集まり、任意サークルとして「築港町猫倶楽部」を結成。①「町猫」の考えを広める②避妊・去勢手術を普及する③町猫の一代限り一生の保護・管理を行なうを目的として活動を続けてきました。資金は賛同者からの寄付やイベント収入で賄(まか)なとされ、フリマはそのための活動の一つ。

一回目となったこの日は同地区の主要道路路上(カフエ星の森)前で朝から夕方まで開催。地域の人々や観光客が呼びかけに足を止め、衣類や雑貨へ盛んに手を伸ばしていました。

西浦さんと尾崎さんによると、天保山地域では近年、天敵がいなくなった環境で異常ともいえる野良猫の繁殖が繰り返され、鳴き声や糞尿

の苦情が相次いでいます。これには「不用意な餌やりをしない」のが一般的な対処法とされていますが、ただ餌やりを禁止するだけでは猫に「三箱漁り(あき)や観光客への餌ねだりを覚えさせたり他地域へ移動させたりするだけに終わることはこれまでの経験が教えてきたといえます。

そこで「回(かえ)り者扱いするのではなく、共存できないだろうかと考え、出てきたのが「避妊・去勢で繁殖を止め、定位置でのエサ場とトイレの確保で周辺被害を最小限に抑えよう」という『町猫』の発想でした。以来、倶楽部の代表として動いてきた二人は「可哀想(かわいそう)と思うだけでも苦情を言うだけでも現状は変わりません。罪のない猫と人が共に気持ちよく生きていけるよう力を合わせましょう」と賛同者を募(も)っています。次回の取り組みは、四月二十八日(土)十一～二十時に「あわや食堂」(築港一・八・一七、六五七一・一〇七三)周辺で。「おばあちゃん家の町猫カフェ」(会場は同食堂奥の離れ座敷)「まち猫ブローチ・ワークショップ&オープンカフェ」(会場は路上など)。問い合わせは尾崎さん(☎〇九〇・八八二・一〇九〇)まで。

子供の歓声 内に外に

「スポみど」「パラメニューわんき



→ 朝から夕方まで子供たちの歓声が溢れた三月二十三日の港区。写真は「八幡屋公園スポーツみどりフェスティバル」でのポニー乗馬体験

三月二十三日(日)に開かれた「こども」区内外から多くの家族連れが訪れ、盛り沢山なメニューに、朝から夕方まで、館内で、好天の下で、子供たちの歓声が響きました。

●スポーツみどりフェスティバル

このうち八幡屋公園で開かれた「八幡屋公園スポーツみどりフェスティバル」(スポーツパーク八幡屋活性化グループが主催)では、中央体育館と芝生広場と大阪プールを会場に、弓道などのスポーツ体験や五十メートル走測定、お菓子の計量、自然工作教室、ポニー乗馬体験、小動物(ヤギヒツジなど)との触れ合い、アルパカと記念撮影、カリンング体験などのコーナーが設けられ、参加者は普段できないスポーツや自然遊びを楽しんでいました。

●こどもパラダイス

一方、港区民センターで開かれた「こどもパラダイス」(一般財団法人大阪市コミュニティ協会港区支部協議会と港区役所が主催)では、「ダンボール迷路カリグラム(文字絵)」「数字合わせサイコロ作り」「アルファベット折り紙」「英字新聞化フローチャづくり」など「字」(文字・数字・英字

「防災体験コーナー」(中央体育館で模擬消火器から水を飛ばす子供ら)と、「こども囲碁コーナー」(港区民センターの対局風景)



こども)をテーマにした遊びや、「手づくり体験」「こども囲碁」など手や頭を使う遊びのコーナーに子供たちが群がっていました。

●「豊島」を遊び切れない

五歳女児と三歳男児を連れて両イベントに参加したという三十代夫婦(池島)は「シャツルバスを利用して午前は八幡屋公園で、午後は港区民センターで遊ばせました。二人ともポニー乗馬が一番楽しかったようです。健康的な催しで大変感謝していますが、親としては結構疲れました(笑)。メニューが豊富すぎて、とても一日では遊び切れませんね」と話していました。

あの頃より

池島・勝部泰臣 八十歳

町内の回覧板に、卒業する小学八年生の「将来なりたいもの」が載っていて、今昔の違いをふと思った。「サッカー選手になりたい」「フットボールの選手になりたい」「アナウンサーになりたい」「バチン」屋の経営者になって金持ちになりたい」子供らしい正直さが出ていて大笑いなど。」「海兵（海軍兵学校）に入って海軍に」「陸士（陸軍士官学校）に入って陸軍大将」「戦前・戦中の男の子はそう言った。親も、軍国少年を育成する国の方針に、当たり前前に「そうなれよ」と頭を撫でてくれた。そうでないと「非国民」とのいられる風潮であった。

本紙ですっと続いている「戦争体験」。ありとあらゆる不幸と悲慘があり、全ての人が何らかの悲しみと別れを経験した。今、この平和の時代、品物は豊富。腹が減った「白い飯食いたい」などと言う人はいない。そしてこの平和は多くの人々の「命」の代償として実現したものの。口惜しい悲しいけれども、そんなだからー。

田中二丁目東町会の取り組みに注目

八幡屋・六十代男性

「自分たちの町は自分たちの手で！ 単位町会が進む地道なまちづくり活動」(町会二頁)を読んだ。田中二丁目東町会の会長さんが、普段の生活で誰もが思っていること、感じていることを、行政に向かって気軽にどんどん出されているところに驚き、「こんな場がうちの町会にもあったらもっと皆が生き生きするの……」と正直思いました。これらの声のうちどれだけが実際に行政に生かされるかは疑問ですが、こういった場が設けられたこと自体が素晴らしいと思います。うちの町会も含め、一般の町会が益踊りと歳末警戒だけでよいとされているのでは雪泥の差いのように思われました。とほい、声を出すだけではもちろん問題の解決にはなりませんので、最後の出席者の感想にあったように、「集まっては行動し、行動しては集まる」とを繰り返しながら、段々いい町になっていくことができるかなと思いますが、この町会のこれから課題であると思います。今後、この町会を

ついつい継続的な取り組みがされているかどうかをまた取材して記事にしてみれば、他の町会への一層の刺激になるでしょう。地域活動協会の陰で影が薄くなっている」といわれる町会の存在意義も高まると思われます。

「あさやけ」から根本問題考えた

田中・四十代会社員

ネット読者です。じつは「あさやけ」を一番に読みます。今(町会)では監視カメラや詐欺の横行を題材に、この社会や宇宙の根本に目を向けようと提起されていたように思います。私自身、「仏様」のことは時々頭に浮かび、お盆やお葬式時には多少意識しますが、「神様」や「天地創造」などこれまで考えたこともありませんでした。が、確かにこれだけ世の中が乱れていて、どういふまじき世の中に入れないうち解決策は見出せないようにも思われます。ひょっとしたら、私たちが「土俗」だと思っている「進化論」などは、実際には非常にいい加減なものなのかもしれません。一度勉強してみたいと思います。楽しく読める文章の中へ、

人生や社会の根本問題にも目を向けさせてもらって感謝しています。

.....

猪伏さんの平和への思い伝わってきた

（三死・六十代女性）

「東アジアの平和願って」と題する猪伏昌三様の「特別寄稿」（前頁八頁）に感銘を受けました。戦後は創価学会に入会して活動されてきたと前号（前々号）で知り、私自身はそういう信心や活動を、どろろかといえは嫌っている方なのですが、そういうところが気にならないほど。この文章は素晴らしいと思います。特に終盤の、日本・朝鮮半島・中国という三つの国で少年期を過ごした数奇な縁を懸け橋に、残る人生を東アジアの恒久平和のために注ぎたい。この件には、これまで読んできた猪伏様の少年時代の様々な場面（お父さんの死、満蒙開拓青年少年義勇軍との接触、生き残りのための労働、苛酷な引き揚げ行）などが思い出されて、胸が熱くなりました。池田大作氏のものと思われる結びの言葉「平和こそ、人類の進むべき根本の第一歩であらねばならぬ」にも納得で

↑ 辻悦子さん（市岡元町）からの絵手紙



す。戦争を憎み平和を願う心には政党・政派も宗教・宗派も関係ないと改めて思った次第です。一年近く回って色々と教えて頂いたこと、心から感謝しています。

ライブ感たっぷり「市岡寄席」

（市岡・五十代男性）

「古典落語に大笑い 市岡西明寺で地域寄席さらに熱気」（前頁二頁）のライブ感たっぷりの記事に感心しました。桂文枝さんの創作落語のファンですが、有名な古典落語のストーリーもある程度知っています。この記事では一つの断を「ソパクト」にまとめられた上、「丁寧」に枕まで入っていて、福丸さんの面白さが十分に伝わってきました。この寄席の二回目に参加したきりで、あとの二回は行けなかったので、次はぜひ行きたいと思っています。

.....

戦中の空気がよく伝わってきた

（弁天・六二歳女性）

坂本京子さんの「戦争体験」（前頁三頁）が良かったです。これまで猪伏昌三さんの体験談が長く続いて、毎回感銘を受けてきましたが、今度は女性ということで、また違った視点からの体験が聴けるかと楽しみにしています。数年前に相次いで他界した両親からもっときちんと戦中のことを聞いておけばよかったかなと

て後悔していますので、いついた記事はいつも貴重に思います。今回の坂本さんのお話では、中国で戦争が始まっている時代でも、アメリカやイギリスと戦争が起るまでは小学校生活が「楽園のようだった」ということが意外に感じられました。戦前・戦中は暗黒時代だったように色々な人から聞かされ、新聞やテレビもそのように伝えていたので…。それでも疎開生活でいつもお腹をすかせていたことや、親と離れてるのが寂しくて布団の中でしくしく泣いたことなどから、戦争中の空気がよく伝わってきました。次回からのお話も楽しみにしています。

住まいの防犯レベルを高めよう

①ワンドア・ツーロックは常識
②ピッキングに強いカギに交換
③窓にも補助錠の取り付けを

PHS・携帯OK ☎0120-70-5569

(ア) 港カギ防犯センター

安全・安心を
ご提供します

港区港晴1-4-8
(港晴小学校並び)

☆大阪府鋭前技術者防犯協会会員
☆港防犯協会会員 ☆防犯設備士第00-6738号

あれこれガイド

●大正区「原爆と戦争展」 ①第一次世界大戦

の真実②沖縄戦・全国空襲の記録③原爆と峠三吉の詩④敗戦後の日本⑤福島原発災害などの写真パネルや「原爆と戦争の体験を語る集い」を通じて、日本の現状をもたらした原爆と第二次大戦の真実に迫り、被爆者・戦争体験者の平和への思いを伝え、平和で豊かな未来のために何ができるかを考えます。十二回目。六月八日(金)十四～十八時、七日(土)八日(日)十～十七時、大正区コミュニティセンター(大正区千島一



→一九四五年八月七日の広島島の惨状(爆心地から一・二キロのテント内)①と、同八月九日に広島市内に入る救護隊Ⅱ展示予定の写真から

六・一五、市バス(大正区役所前)の隣第四・五会議室で。入場無料。主催は大正区原爆被害者の会・大阪原爆展を成功させる会(TEL・FAX六三二四・二八四一)。

●海の写真コンクール 海への関心を高めるため国民の祝日「海の日」(七月二十一日)に向けて毎年実施。三十六回目。海運・造船・港湾・湖・川・魚など広く海をテーマにした写真を募集。カラープリント四ツ切(ワイド四ツ切を含む)又はA4サイズ、いずれも平成二十五年六月一日以降に撮影した単写真に限る(合成や変形で事実と異なる加工作品は不可)。六月十八日(日)必着。主催者による審査にもつき、近畿運輸局長賞(賞金三万円＋トロフィー)、大阪府知事賞(賞金一万円＋トロフィー)、大阪市長賞(同)、大阪海上保安監部長賞(同)、入選三十点など各賞四十点が選ばれる。発表は七月中旬。展示は海遊館エントランスビル(七月中旬～八月中旬)に上位十点のみと海フェスタ京都「海の総合展」(七月十九日～八月三日)に全入選作品で。全入選作品はHPで閲覧可。応募及び詳細は主催の公益社団法人近畿海事広報協会(〒5

← 海への関心を高めるために今年も開催される
「海の写真コンクール」(写真はイメージ)



52・0021 大阪市港区築港三・七・一五
港振興ビル204号室、☎六五七二・六三八七
HPアドレスは<http://kinkikka-i-j-i-sakura.ne.jp/>へ。

●お墓参り写真コンテスト「フォトコン2014」

4 「笑顔でお墓参り」「先祖様に報告」「尊くお参っている姿」など『幸せのシンボル』としてのお墓やお墓参りを撮った写真(プリントでもデータでも可)を募集。「庵治ストーンフェア2014」協賛イベント。八月半までのメッ

セージ(手書きでもデータでも可)を付ければ

なお歓迎。「お墓100年プロジェクト」加盟石材店へ持参又は郵送。賞金は大賞(二名 五万円、審査員特別賞(二名 一万円、庵治ストーンフェア賞(二名 一万円、奨励賞(三名)記念品。応募は五月 二十四日(土)まで受付中。審査発表は六月 十八日(土)ホームページで。詳しくは主催の「お墓100年プロジェクト」のホームページ(<http://ohakai-onen.blog.fc2.com/>)で。

●ムチ打ち(首・腰)無料相談会

交通事故でムチ打ちになった被害者を対象とした無料相談会。四月 二十七日(日) 十時十八時に行行政書士のむら事務所(築港三・七・一・六〇八)で。一人約一時間。事前予約制(電話かEメールで)。

「どうしたら正しいな補償が得られるかをアドバ

イスします」「事故後、早めの相談が良い結果につながります」(同事務所・野村光恵さん)。Eメール info@jikkoo110-nomura.com、TEL 六五七六・六〇七八、FAX 六五七六・六〇七九。

●ワークみなと「東北食品市」

東日本大震災

で被災した福島県いわき市の精神障害者作業所が震災前の地元産材料、宮城県産材料、昔ながらの製法で作った体と心にやさしい豆腐・豆乳・青豆腐・ドーナツなどを販売し、復興努力を物心両面で支援。毎月第一・第四火曜十五時半から(売り切れ次第終了)▽ワークみなとは主に精神障害者を対象とした就労継続支援B型の指定障害福祉サービス事業所(夕田一・六・三、☎六五七一・七五一一)。

●石綿(アスベスト)パンフ

肺がん、中皮腫などの病気や、息切れ、胸の苦しさなどの症状や、それらによる死に「アスベスト(石綿)によるものだ」と認められたら色々な給付を受けられる。そんな人たちが家族のために、①石綿による病気②補償や救済の制度③問い合わせ先などを厚労省と環境省などがまとめたもの。タイトルは『その病気、その症状は石綿(アスベスト)が原因かもしれません』。港区で暮らすか働く人なら港区役所(全市画一・一五・一五三階の港区保健福祉センターのチラシスタンドに設置してあるものを無料でもらえる)。

滑走の爽快さを広げよう

スケートサークルが発表会



→アイススケートの楽しさを感じさせてくれた「N・I・Cスケートフェスタ」(写真は最後を飾ったフォークダンス)＝3月8日、大阪プール

「滑走の爽快さを多くの人に」とアイススケート愛好者によるイベント「N・I・Cスケートフェスタ」が三月八日夜、大阪プール(田中)で開催されました。港区民も参加するN・I・C(ななば)アイススケートサークルの主催で三回目。

★市民のスポーツ環境向上へ

まず新冢正信会長(七二)＝市岡在住、区内で経営「コンサルタント業」が関会あいさつに立ち「N・I・Cは四年前に発足し、老若男女が地域や年齢を越えてスケートを楽しんでいます。また原田事務局長を中心に活動し、リンクの管理監督者である大阪市に対し練習環境の改善を求めて様々な要求活動を行なうなど、市民のスポーツ環境向上へ多少の存在意義もあるかと自負しています。今日はアイスダンスの第一人者・藤本泰司顧問の指導のもと、最後まで大いに楽しみましよう」と呼びかけました。

★ワルツやタンゴに乗って

このあとオープニングのフリー滑走に続いてアイスダンスのペア九組とシングル演技の八人が、ワルツ、タンゴ、スイングなど様々な音楽の調べに乗って次々と練習の成果を披露しまし

「安定感ある滑りでトップを飾った上村裕美・藤本泰司ペアの「タッチワルツ」①と、ほんわかムードが微笑ましかった振本あけみ・井上順二ペアの「キャナスタ・タンゴ」②



た。中でも一昨年、昨年が続いて三たび羽織袴と扇子の和装で登場し、若柳流日本舞踊「白雲の城」(氷川きよし)を舞った新冢会長の演技には、その大胆さと意外性、また年々向上する所作の滑らかさ、さらには風格さえ漂わせる存在感に、観客から大きなどよめきと拍手が起りました。

スケーティングの技量は様々ながら、どの演技者も、滑走の爽快感と「注目される歓び」に溢れた、爽やかな笑顔が印象的でした。また、ぎこちない滑りや転倒にも平然と演技を続ける本人の表情の明るさや、「がんばれー」と声援を送る仲間たちの温かさからは、同サークルのアウトホームな雰囲気伝わってきました。

←なめらかな滑りが溜息を誘った萩昌子・藤本泰司ペアの「スイングダンス」⑤と、切れのある滑走と高い音楽性で魅了した牧野昌弘さんの「歌劇『愚者との生活』よりタンゴ」⑥



フィナーレは一般参加者も加わって恒例の氷上フォークダンス。全員が輪になり、藤本顧問の指導で振り付けを練習し、すぐに本番。一線路は続くよどこまでも」の軽快なメロディが流れる和やかな雰囲気の中、お開きとなりました。

★一歩ずつ下達してい

出場者のうち、「スイングダンス」の曲に乗り、藤本顧問とのペアでなめらかな滑走を披露して会場の溜息を誘っていた萩昌子さん(ハナコ)＝堺市在住＝は「アイススケートは大学時代から楽しんでいましたが、スキードダンスを教わっていた先生から『シーズソフにはアイスダンスがいいよ』と勧められ、一年前からこのサークルで本格的に練習するようにしました。スケ

ートの魅力は何といっても滑走の爽快さですが、練習すれば少しずつでもそのレベルに向かっているのが楽しいです。スケートを通じてお友達ができるのも嬉しく、それに老化防止(笑)にもなりますからね」と話していました。

★オペラを氷上で表現したい

また「歌劇『愚者との生活』よりタンゴ」の曲に乗り、スピード感溢れる滑走と、高い音楽性を感じさせる美しい動きで喝采を浴びていた牧野昌弘さん(四五)＝中央区在住＝は「伊藤みどりさんらが活躍されていた頃からフィギュアスケートには興味があり、鑑賞を楽しんでいました。仕事で歌劇の舞台に立つたり指導したりしていますが、その世界を氷の上で演じたい



→扇子さばきも鮮やかに風格漂う舞いで注目を集めた新家正信さんの「白雲の城」⑤と、情熱とダイナミズム溢れる滑りで魅了した中村光則さんの「リベルタンゴ」⑥

←息もぴったりの安定感ある滑走に拍手が起こった長瀬まさ子・江田昌平ペアの「タッチワルツ」④と、着実・華麗なステップでラストを飾った井上智香子・藤本泰司ペアの「タンゴ」⑥



ーといっ思いが募り、十カ月前からこのサークルで練習が続いています。氷上では美しさに加えてスピード感や緊迫感も表現することができるとにかく楽しいです」と話していました。

★初心者からベテランまで

NICは「アイススケートの楽しさを多くの人に」との目的で二〇一〇年五月に発足。大阪府下在住の二十代～八十代の男女約七十名が在籍。会員のスケート歴は初心者から六十数年のベテランまで様々。毎週、中央区難波の「なにわスケートリンク」で練習を重ねています。問い合わせは☎〇九〇・三三八二二・二四三三五 新家芸長まで。

荒技・珍技に大興奮

「みなとプロレス」第三弾



→荒技・珍技の応酬に沸いた「みなとプロレス」第三弾(写真は第五試合で悪役チームの反則に耐えるミッキー隼野ジュニア目世)

「長期不況に苦しみ地域を元気に!」「青少年に正義感と勇気を!」と港区のプロレス団体「みなとプロレス」の第二回興行が三月十八日午後、港区民センターで開催され、詰めかけた区内外のプロレスファン百人超が、迫力とユーモア溢れる荒技・珍技の競演を楽しみました。

◆タッグやシングルで五試合

五試合が行なわれ、第一試合(十五分一本勝負)は影山道雄が高橋マサナリに八分二九秒「片逆エビ固め」で、第二試合(二十分一本勝負)はHARU.&富士飛艇組が藤井健一&佐野直組に八分五四秒「ダイビングセントーン」↓「体固め」で、第三試合(二十分一本勝負)は佐野泰が川村鉄平に七分二十秒「アングルホールドを押し込んでの丸め込み」で、セミファイナルの第四試合(四五分一本勝負)は石橋葵&マグニチュード岸和田組が杉浦透&ラ・マルクリアード組に十三分五二秒「リアアット」↓「体固め」で、ファイナルの第五試合(六十分一本勝負)はミッキー隼野&ミッキー隼野ジュニア目世&正岡大介&グラン浜田組がグレートカイザー&根本薫&黒影&ディアプロ組に十四分三九

「反則に耐え続けた後で反撃に転じるミッキー隼野ジュニア目世」と、観衆を唸らせた根本薫の見事なバックドロップ」



秒「浜ちゃんカッター」ダブルホール固め」でそれぞれ勝ちを収めました。

このうちメインの第五試合で「転二転の末に勝利した四人組のリーダーでみなとプロレス代表のミッキー隼野さん(五〇)＝田中在住＝は試合後マイクを握り、観客に向かって「この歳になつてポンコツと言われても、港区を元気にするためにこれからも興行を続けていきたいのでよろしく」と呼びかけ、大きな拍手と声援を浴びていました。

◆反則技に耐える姿から勇気

観衆の一人で愛知県から来たという四十代男

性は「どの試合も面白かったです、特に最後の試合に興奮しました。私自身サフリーマンで嫌なこともありますが、反則技にも耐え続ける姿に、俺も負けずに頑張ろうと勇気をもらいました。またミッキー隼野さんが故障や年齢を乗り越えて頑張られ、収支面の厳しいさも厭わず興行を続けておられる姿にも励まされました。今日は正直なところ観客の入りが心配でしたが、これだけ多くの人が来られたのを見て、それだけ熱いものがここにはあるのだと思いました」と話していました。

◆魅力のパフォーマンス

次々と繰り出される高度な技、巨体がマット叩きつけられる際のバーンという衝撃音、相次ぐダメージに耐え抜く強靱な股体、息詰まる攻防の合間に見せるユーモア溢れる仕草や口撃―特設リングとその周辺で展開される肉體パフォーマンスは、プロレスファンならずとも思わず惹き込まれる魅力に満ちていました。特に場外乱闘では、観衆にかなりの恐怖を感じさせながらも決して危害は加えない絶妙のバランスに、プロの技量を感じられました。

← 高齢でも大車輪の活躍で観衆に元気を与えたグラン浜田①と、「みなとプロレスをよろしく」と呼びかけるミッキー隼野②



また、招待された障害者作業所の青年らが悪役の反則技に「きたねえぞ」「いい加減にしろ」などと声を張り上げる姿や、正義派レスラーの反撃に小学生らが「頑張れ」と拍手を送る姿からは、困難に負けない生き方を青少年に示すというプロレス本来の役割を「みなとプロレス」が真摯に果たしていることが感じられました。

今回の興行を企画したミッキー隼野さんはかつてアマチュア覆面レスラーとして活躍し、負傷でリタイアしたあとは後進育成などに注力。二〇一一年一月地元港区の活性化を願って「みなとプロレス」を旗揚げしました。

スポーツ短信

●大阪・港小・イズ（少年硬式野球） 三月十六日に「体験練習」を実施。小学生多数が参加。同二十一日には「三年生お別れ試合」を開催。進路が決まった開放感もあり、心から野球を楽しんでいた。四月には阪神淡路大会、泉州大会に参加の予定。硬式野球に興味のある小・中学生の体験練習・入部説明随時。 ☎ 〇五七二・六七五三 スポーツさんわ又は ☎ 〇九〇・八三八五・四八△五香西。

代筆

～何でも書きます、まとめます～

- ★手紙・案内・報告・宣伝・司会などの文案
- ★自分史・社史・団体史などの聞き書き
- ★新聞・広報・書籍・会報などの取材・編集

港新聞・飯田編集事務所

TEL・FAX: 06-6571-4636

Eメール: yamaemi@bridge.ocn.ne.jp

http://osaka-minatonews.sakura.ne.jp/

二十年間の思い込めて

「春のセンターまつり」賑わう



→最後のビッグイベントとなった弁天町市民学習センター「春のセンターまつり」(写真は二胡サークル琴韻による『おぼろ月夜』演奏)

弁天町市民学習センター(弁天二丁目のオーク2番街)で活動する学習グループが日頃の成果を発表する「春のセンターまつり」が今年も三月八日から十六日まで開催されました。市政改革による三月末廃館を前にした最後のビッグイベントということで、会場には設立以来二十年間の思いが溢れていました。主催は同センターと春のセンターまつり実行委員会。

●あらゆる分野の展示や体験

会期を通じて行なわれた「作品展示」では、刺繍、押し花、お菓子、絵画、絵手紙、日本画、写真など十三グループによる展示が行われ、来場者が顔を近づけて眺めたり、創作法を熱心に質問したりする光景が見られました。

同じく会期を通じて開かれた「一日体験教室」や十五、十六日にロビーで開かれた「美演&体験」には篆刻、書道、シニア体操、着物着付け、油絵、手話、民謡、キッズ絵画など五十一もの教室が参加し、興味を抱いて訪れた市民に担当者丁寧な手解きを行なっていました。

●緊張と歓びのステージ

四四目の「ときめきステージ」では、オカリ

ナ、太極拳、尺八、朗読、梅花扇など二十四グループが次々と登場。発表の緊張と歓びに溢れた舞台上に盛んな拍手が送られていました。またこの日は「お茶席も設けられ、鑑賞の合間に抹茶を囲んでお喋りする姿も見られました。

●五月から民間が運営へ

同センターは一九九三年に設立。大阪市教育振興公社が市から委託されて管理・運営を行ない、市民の「生涯学習の場」生きがいづくりの場として機能してきましたが、「市政改革」の煽りで「コスト高を理由に、市内五カ所の市民学習センターのうち城北と共に、この三月末で「廃館」となりました。入居する建物「オーク200」の所有者(オーク管理㈱)がいったん管理を引き継ぎ、一カ月の準備期間を経て五月から、民間が運営を再開することになっていますが、「このセンターは職員と市民が一体で作上げた地域の財産。赤字でも黒字でも残すべき」市立やからこそ良心的な運営がされたのに、民間にそれができるんか」などの声が利用者や市民から未だに出ています。

●「アットホームだった」と利用者

これについてはこの催しの中でも声が聞かれ、

参加者のうち舞台発表を控えた薬港在住の六十代女性は「このセンターが設立された二十年前から水墨画や二線の教室で活動してきましたが、職員の方がとても親切で、アットホーム。こんなに多くの人に楽しく利用されている施設は他にありません。それが『コストが高いから』という理由で廃止されるなんて残念でたまりません。市の財政が苦しいのなら、削るべき分野はほかにはたくさんあるのではないのでしょうか。五月から民間が運営するということですが、これまでのように良心的な運営がされるか、不安で



→哀愁の音色に唱和が起った「大正琴ながよし会」の演奏⑤と、演者の楽しげな表情が印象的だった「青空みかんの紙芝居の会」の上演⑥

す」と話していました。

●「市民が主人公」心がけた五年間

また、所長として五年間、同センターの運営に携わってきた菱岡省ひしおかちよう「所長は次のように語っていました。

「最後の『センターまつり』となりましたが、これまで以上に盛りだくさんな内容で楽しんで頂けたと思っています。思えばあつという間の五年間でしたが、スタッフと共に、『市民の皆さんに気持ち良く利用して頂く』という思いだけでやってきたように思います。皆さんの楽しそうな笑顔を見るだけで疲れも吹き飛んだものです。『市民が主人公』『市民自らが楽しみや生きがいを見つucker場』という生涯学習センターの基本を何より大切に、また、お互いに顔を合わせ、言葉を交わすことを心がけて情報提供やサポートをしてきましたが、それが新しい運営者にも引き継がれることを期待しています。個人的には、長く青少年施設や図書館など社会教育分野を歩いてきた経験を最後に「ここで生かすことができ、嬉しく思っています。マナーの良い皆さんと力を合わせ、心を合わせて働くこと

「顔のアトリエ」メンバーによるユーモラスな似顔絵に見入る女性たち⑦と、「海外鉄道研究会」による写真を興味深そうに眺める男性⑧



ができた、本当に幸せな五年間でした」

●運営スタッフ変わらず「再出発」へ

その後、本紙に入った情報によると、同センターは予定通り五月から民間の運営となり、名称も「オーフ井大町ORC2000生涯学習センター」と変わりますが、直接の業務は、菱岡所長これまででの職員・スタッフの皆さんが当たることになりました。同所長は「積み上げてきたものを無駄にせず再出発でき、ホッとしています。従来通り生涯学習センターの基本を大切に運営に携わりますので、引き続き市区民の皆様のご利用を期待しています」と話していました。

みなと

人

生

劇

場

港区民の手記をもとに、地元在住の作家・青木健一さんがフィクションとしてつづる。当地ドラマ。シリーズ第五弾は、築港在住の九代女性が七十年代前に経験した、はかなくも美しいラブ・ストーリー。

ぼて丸の恋 (二)

「芝田さん お疲れさまでした。じゃあ、また月曜日にお迎えに来ますからね。」快活な女性スタッフの笑顔に、世津子は深いお辞儀で感謝を表わしながら、ディスプレイセンターの送迎バスを見送り、店に入った。

午後四時半。四月の空はまだ明るい。店といつても七年前に閉じてそのままになっているお好み焼き店だ。「お風呂に入って、お昼ご飯を食べて、色んなゲームをして、それから最後に『青葉繁れる桜井のー』と楠公さんの歌をみんなであおはじき」で歌って…。」とディスプレイでの楽しかった時

間を振り返りながら、「ぶっぶっぶ」とソファに体を沈める。

まだ一人で歩けるが、やはり両の膝がきつい。それでもセンターの利用者やスタッフから「芝田さんはほんま元気やわ」と羨ましがられるほど、ほかに悪い所はなれいってない。「けっこつなこつちゃ」。そうひとりでちながら、ソファの背にもたれるや、反射的にテレビのスイッチを入れた。が、夕方のこの時間、どのチャンネルにもめぼしい番組はないので、すぐに消す。最後のチャンネルではどこかの飲食店の紹介をやっていた。そや…今日の昼ご飯はなんやったかいな…。しばらく考えたが、ぶっぶっに出てこない。「やっぱりボケてるわ、ハハハ」。薄暗い中で、壁に貼ったままのお好み焼きのメニューが微かに笑い返したように見えた。次のディスプレイ「スまで二日もある。世津子はちよつぷり憂鬱になった。

晩ご飯の準備をするにはまだ早い。一人だから、「飯だけ仕掛けて、近くのスーパーで出来あいのおかずを買ってくれば済む。ちよつと考えて、世津子は以前、自分の投書がきつかけで

戦争体験を聴き取って記事にしてくれた地域新聞の記者兼社長に電話を入れた。

「社長、また投書するから、どんなこと書いたらええか、教えてえな。運よく在社していたその社長は生まじめに、これまで何回も同じことを求められて答えたことを繰り返した。彼女の生まれ育った愛媛県の海辺のこと、道楽者だった父親のこと、働き者だった母親のこと、戦病死した兄のこと、戦後はこの築港で四十年以上も飲食店を営んできたことなどを思い出すままに書くよう勧めるのだった。戦争体験を聴き取った際に、その前後の話もメモしてくれたいたその社長の頭の中には、彼女の人生の大きな流れが入っているようだった。「よっしゃ、分かった。頑張つて書けわ。書けたらまた電話するから、また寄つてや。ありがとな社長」。

さっそくソファの前のテーブルの下から原稿用紙と鉛筆を取り出した。故郷のことか、父親のことか、母親のことか、兄のことか、それとも店のことか…と迷いながら、結局、世津子の筆は進まなかった。これもいつものことだった。が、そうして何か書こうと過去に思いを巡らす

じつがボケ防止になる、とその社長に言われて、
じつじつとあって、テーブルに向かった世津子
の右手は鉛筆を離すことがなかった。

故郷のじい、父親のじい、母親のじい、兄の
じい、店のじい…。世津子の頭の中はぐるぐる
と回り始めた。故郷のじい、父親のじい、母親
のじい、兄のじい、店のじい…。そして、そし
て、あの方のじい……。

——そして、あの方の背の高いあの方が、
いつか訪ねて来て、背をかかぬながらこの店の
暖簾をくぐられる。「ぼて丸さん、お元気ですか」。
そして、声をかけて下さる。「よかったです、近
くに遊びに行きませんか?」。すると、
と私はきつと「お答えです」。は、はい。デ
ィサービスがある月曜と木曜以外なら、いつで
もいいですよ」と。それまではけっして昼間、
玄関の鍵をかけずにおこう——。

ずっと独身を通してきた世津子にとって、そ
れは文字通り、最初で最後の恋だった。七十年
以上も昔、あの戦争が始まって間もない昭和十
七(一九四二)年春。ちよつと今日のようなよく
晴れた一日だった。戦争体験を詳しく話した中



でもこれだけは明かすことがなかった、小さな
けれども宝石のような、美しい時間……。

世津子は大正十二(一九二二)年、愛媛
県周桑郡三芳町(現西条市)に生まれた。父
は漁師。世津子は三人兄妹の真ん中で、四歳
上の兄と一歳下の妹がいた。父母を中心に、家
の前の遠浅の海から浅瀬、馬鹿貝などの貝類や
海苔などの海藻類、それに細かい 鯛の餌な
どを採って生計を立てた。収穫は豊富で、朝採
った物は夕方にはお金になったので、貧しくて
も食べることに困った記憶はない。月に何度も
広島から小さな船でやって来ては、世津子らが
採った鯛の餌などを買い取り、広島へ戻ってそ
れを売って暮らす家族もあったほどだ。それで
も冬の海は冷たく、世津子は子供心に仕事ごと

ても辛かったのを今も思い出す。

●働き者の母と道楽者の父

母は父より一歳上で、とても優しく働き者だ
ったが、父は歌や踊りには好きなだけ金をつぎ
込む、いわゆる道楽者で、「惚れた弱みで一緒
になった」という母は随分苦労したようだ。浜
の収穫物を船で下関あたりへ売りに行った帰り、
女郎屋のある島へ寄って金を使い果たし、船を
売って汽車で戻ってきた、ということもあった。
そんな中でも母の里が裕福だったのが救いで、
よく家計の窮境を助けてもらっていたよう
だった。

●減らしのため紡績工場へ

世津子は尋常小学校を卒業するはずで、
減らして家計援助のため、今治市の綿紡績工場
へ働きに出た。そこでは数百人が働いていたが、
同じ村の者が多く、九州方面からかなり来て
いた。制服は普段が紺色で、夏場は白。帽子は
かぶったが、工場内に綿埃が舞っていたにも
かわらず、世津子にはなせか、マスクをつけ
た記憶はない。大きな食堂や売店があり、工場
内は活気に溢れていた。

戦争と貧困に負けず

心洗われた音楽劇『大阪希望館』



→ 終戦直後の保護所を舞台にたくましく生きる人々を描いた『大阪希望館』（写真は冒頭のうどん屋の場面） 三月下旬 波除の世界館で

食えることが全てだった戦後の混乱期、大阪に実在した一時保護施設を舞台に、戦争の影を引きずりながらも逞しく生きる人々を描いた音楽劇『大阪希望館』が二月下旬、世界館（港区波除）で上演され、反響を呼びました。

波除のフリースペース「石炭倉庫」を拠点に庶民の生活感情や社会的メッセージを込めた演劇を世に問い続ける「あんがいおまる」一座の特別公演。直木賞作家・難波利三さんの原作を、座付き作家だった故綾羽一紀さんが脚本化、あんがいおまる座長が演出。ヨシシー原本さん、浜木克行さん、大島昇さん、ゆづりさんら主力俳優に加え、港区弁天の山本恵さんや数人の子役も出演、入魂の演技で平和と希望のメッセージを発しました。

十七年前から九十回近く演じられ、初回は故・田中徳三さん（松竹映画監督）が、十回目には難波利三さん自らが演出。その後、音楽劇形式を採用して今回に至っています。

★戦後の一時保護所を舞台に

——戦争の傷跡も生々しい昭和二十一年一月、大阪駅構内に実在した一時保護所「大阪希望

館」が舞台。強引とさへ見えるやり方で運営を続ける館長の北村。東京空襲で家族を亡くした青年板野はひよんな事件から彼と出合い、その人間性に惹かれて手伝い始める。浮浪者を收容して餓死・凍死や犯罪を防ぎ、働ける者には仕事を、病人には病院を世話するのだ。館には事務長の沼、賄いのしのぶや軍士、空襲で孤児になった松子らが働き、被爆女性や天才画家や元特攻隊員、それに幼い子供らも收容されていた。

北村は警察と掛け合って闇米を回させたり、企業に寄付金を出させたり、進駐軍の干渉を逆手につづ物資を供給させたり、また子供らにボイスカウトの恰好で交通整理をさせたり、健康な男たちを「張区鉦」へ送り込んだり、さらにはそんなネタを新聞記者に提供したりと精力的に動くが、大阪空襲で妻子を亡くした無念の心の内を知るのは、やはり戦争で夫を亡くしたしのぶだった。一方の板野は松子の悶えを心に入り、失った言葉を取り戻させる。

やがて收容者が溢れ、やむなく松子らを精神病院へ移すが、経営者の身勝手な処置で餓死させられるという痛ましい事件が起きる。落胆と

悲しみの中、死者より生きている者を重視するかのよつな北村の口ぶりに板野は反発する。数日後、子供らの絵をアドバルーンと共に揚げる「青空展覧会」が淀川河畔で大々的に催され、皆は感動と希望に沸いた。が、その直後、心の区切りがついたのか、北村は妻子の位牌と共に姿を消した――。

★「あの頃を思い出す」

全体を通じて、ロングラン上演ならではの役者陣の安定した情感豊かな演技が秀逸。観る者を六十九年前の大阪へ引き込み「金の不況が心の不況になった今の日本。貧しくても助け合い、希望を持って生き抜いたあの頃を思い出そうよ」とのメッセージが心を洗いました。

また「無差別爆撃で家族を失った」「広島と長崎で原爆を受けた」「第五福竜丸で放射能を浴びた」「チエルノブイリを取材した」などの証言で幕が開き、エピソードでも「六十九年前に終わった戦争が最後の戦争だと誰もが思ったのに……」「地球を外から見ると心を持って、戦争のない世界を創りましょう」との言葉がダメ押し的に流れるなど、いじょうにも増して反戦平和

←戦争体験が語られたプロローグと、エンディングでの平和と希望の大会唱①



に重きが置かれていたのも胸を打ちました。

快活・快フンポの主題曲（亀井澄夫さん）はストーリーの楽天性を、美しい劇中歌の数々（西川慶さん、北野隆さん、岩城利之さん）やシルエットを多用した巧みな照明（世界館）は極貧下でもロマンを失わない人々の純粋な心模様をそれぞれ表現。どの党が天下取ってもおんなじや（など）風刺的な台詞も効果的で、子役らの愛らしさは焼け野に育つ草花を彷彿させました。なお同劇団は今回の上演を通じて「骨髄バンク推進」及び「すべての武器を楽器に」の運動に協力しました。

演劇ガイド

●あながいおまる一座フタシオ公演『綾羽一紀』

『世界』 同一座の座付き作家であった故綾羽一紀さんによる「幻影のはかなさ」「一瞬の輝きと淡さ」（川本三郎氏評）の世界を生演奏と語りで味わう。『視線の町』『長浜鈴蘭商店街の映画館』『ガラスの摩天楼』『七分の一秒の軌跡』の四作品をあながいおまる座長が演出。『ミシ』 原本さんとあながいおまるさんが出演。亀井澄夫さんが演奏。五月三日（土）祝十四時～十六時四十分、四日（日）十時半～十三時十分、十四時～十八時四十分の三回。鑑賞料金は三回千八百円、前売千六百円（作品のみの場合は当日千八百円、前売千五百円）。詳細問い合わせや申し込みは会場の石炭倉庫（波除ハ・五・一ハ、JR井田駅から国道四二号を北へ直進、安治川堤防突き当たり右すべ。☎六五八・一・〇六六四、FAX六五八・一・二六七〇、チケット専用フリーダイヤル〇二〇・二三三・四・二三九 Eメール theater@sekittans ouko.com）へ。

漢字一字に思い込め

ギャラリーはたなか「花野元次展」



→好評だった『花野元次作品展』。写真左から花野元次さん、鑑賞に訪れた同級生の高田成子（せいこ）さん、ギャラリーはたなか館主・畠中信子（のぶこ）さん

自称「ええかげんなおっちゃん」のユニークな作品が来場者の心を捉え（とら）えました。みなと通の画廊「ギャラリーはたなか」磯路（いそ）で三月に開かれた『花野元次作品展』には区内外から多くの人々が鑑賞に訪れ、漢字一字に作者の思いが込められた独特のペン画に見入っていました。

◆染料と顔料を使い分け表現

展示されたのは「練（れん）」「芽（が）」「維（い）」など漢字一字の表題を付けたペン画六十数点。それぞれから作者・花野元次さん（田中）の思いが伝わっていると共に、観（み）た人が自分なりのイメージを膨（ふ）らませるよう（よう）にこの意図（いど）もつかがえました。描（えが）く内容（りよう）に応じて、細密（さいみつ）な表現（ひょうげん）が可能な染料（ぞうりょう）と、白黒（しろくろ）をくっきり対比（たいひ）させられる顔料（がんりょう）とが使い分けられているのも印象的（えいさうてき）でした。

鑑賞（かんしょう）に訪れた人たちは、例えば「憩（せい）」と題（だい）した作品（さく）には「厳しい世（よ）の中でもひとときぼんわ（わ）かした気持ちになれるね」、「遭（そう）」と題（だい）した作品（さく）には「大震災（だいしんさい）での津波（つな）が思い出（おも）い出（おも）されて身（み）が引き締（し）まるね」などと感想（こうさう）を語り合（あ）っていました。

◆叔父の影響で芸術の道へ

花野（はなの）さんは一九五〇年八幡屋（はたな）生まれ。物心（ものごころ）つ

「漢字一字に思いが詰まった花野さんの作品。」

上は「維（い）」（顔料（がんりょう）使用（しよう））、下は「限（げん）」（染料（ぞうりょう）使用（しよう））



いた頃から叔父（おじ）（母（はは）の弟（あに））で抽象（たなべ）画家（が）の故（こ）・田辺（たなべ）よしあきさんのアトリエ（atelier）で多くの時間（じかん）を過（すご）したことから自然（しぜん）と創作（さくしやう）心（こ）が芽（め）生（な）え、生業（せいごう）に就（つ）いてからも芸術（げいゆつ）家（か）として、叔父（おじ）の忠言（しゆごん）「売（う）るため（ため）に描（か）くな。表現（ひょうげん）に徹（てつ）せよ」を心（こ）がけてきました。「ええかげんなおっちゃん」を自認（じにん）しながらも、その時々（ときどき）の社会（しやかい）の空（く）気（き）や自（みづか）らの思（おも）いに最も（とほ）ふさわしい表現（ひょうげん）法（ぽう）を試（こ）みるのが花野（はなの）さんのスタイルで二十代（にじゅうだい）では点（てん）紙（し）画（が）（和紙（わし）に細（こ）かな紙（かみ）片（ぺん）を貼（は）り付（つ）ける画（え）法（ぽう）がマス（masu）（三（さん）角（かく））に注（しゆ）目（め）され、数（かず）年前（ねん）には詩（し）画（が）（詩（し）と絵（え）を融（ゆう）合（ごう）させた作品（さく）品（ひん）をこのギャラリーに出展（しゆてん）して好評（こうぱう）を博（ひろ）しました。

花野（はなの）さんは今（いま）回の作品（さく）品（ひん）について「イメージが湧（わ）いたら下（した）描（え）きせず（せず）に仕（し）上げました。題（だい）名（な）を（を）熟（じゆく）語（ご）でなく一字（いちじ）に絞（しぼ）ることで、観（み）た人（ひと）それぞれ（それぞれ）に思（おも）いを広（ひろ）げて頂（いただき）けたと思（おも）う」と話（わ）していました。

エイ革製品に注目

ハルカスで 淡路谷さん入念の技アピール



世界ブランドめざして起業した港区の青年職人がまた一つ階段を上りました。三月中旬にあべのハルカス(阿倍野区)で開かれた「職人展」NIPPONの技」に市岡の淡路谷佳幸さん(二五)がエイ革製品などを出品、独創的かつ繊細な技術に注目が集まりました。

同展は「日本の逸品に出会う一週間」をキャッチフレーズにあべのハルカスグランドオーブン記念として三月十三日～二十八日に開催され、全国から刃物・家具・織物など目を越える分野のものづくり職人が集結。淡路谷さんはこのうち前半(三月十三～十九日)の展示に高級革小物専門店「ルナロッサヨッピー」ブランドで出品しました。

◆財布・ベルト・バッグなど

エイを中心に牛などの皮革を素材にした財布・名刺入れ・パスケース・キーケース・手帳・ブックカバー・ストラップ・ベルト・バッグなどを展示し、マネジャーの大井雄平さんと共に製品紹介や加工実演に忙しく動いていました。

特に来場者の関心を惹いたのはエイ革製品で、淡路谷さんが実物を手に、①原皮はざらざらして

非常に硬い歯や爪でも傷つかない②それをなめすことでビーズ状になる③さらに研磨や瑪瑙による仕上げで滑らかになる④染料で着色た色は使い込むほどにくすんで味わいを増すなどの説明を加えると感嘆の声があがっていました。また、牛革をカンガル革(強くて朽ちない)で縁取りした財布や、裏張りに羊皮を使った手帳なども注目を集めていました。

◆目立たない所にも手を抜かない

淡路谷さんは一九八九年磯路生まれ。磯路小、市岡中から高校を経て化学の専門学校へ進み、卒業後、二十一歳でヨッピーブランドを設立。「ルナロッサ」名でエ革品(レザー・アクセサリ・ジュエリー)を、「ピーシー・スタジオ」名でオリジナルパソコンを手がけ、デザインでは同じパターンを避け、常に新しいものを、加工では「目立たない所にも手を抜かない」をモットーに、「日本発の世界ブランド」をめざしています。家業(燃料販売業)や趣味の剣道にも真摯に取り組みながらの奮闘が二〇一一年十一月、本紙『港の若者たち』で取り上げられました(過去の紙面はホームページで読めます)。

平和のため

戦争体験

語り継ごう

今月の語り部

さかもと きょうこ

坂本 京子さん(八二〇磯路在住) ②

幼雪あらずじ 昭和七年、港区千代見町に生まれた私は日中戦争の中でも平穏な小学校生活を送っていたが、太平洋戦争が始まるや緊迫。六年生で香川県へ集団疎開し、耐乏生活の中で和を学んだ。二十年三月、磯路小の卒業式は運動場で行なわれたが、一度目の式ではなぜかフランク・堺さんが迎えてくれた。

遂に来た大阪大空襲

炎の中で見た悲惨な光景

このフランク・堺さんの参加で、一度目の卒業

業式はとても楽しい雰囲気だったのを覚えています。これには「苦しかった疎開生活のあと、せめて卒業式だけでもよい思い出を残してやりたい」という先生方の配慮があったのかもしれない。ただ戦争末期で物資が不足していたからでしょう、卒業証書はもらえませんでした。

それはともかく、この卒業のための帰阪中にあの大阪大空襲に遭遇しようとは、その時は誰も思わず、私たちは大人の女性たちがするよう、戦地の兵隊さんの「無事を祈って千人針」を縫ったりしていました。しかしアメリカ軍はその頃にはもう、それまでの爆弾中心の空襲から「木造の家が集まる日本の町には焼夷弾が一番効果的だ」とやり方を変えており、三月十日には東京が、同十一日には名古屋が、家という家を焼き払われていました。そして十三日、とうとう大阪がその標的となったのです。

◆空襲警報で安治川へ

この日の深夜、空襲警報が鳴り響くと同時に、大阪港の関門「方向からB29の大編隊（二七四機といわれています）」が現われ、たちまち港区夕丘あたりから西区、浪速区など市中心部にか

けて焼夷弾が豪雨のように注がれました。

我が家では父が警防団の役員をしていて、警戒警報と同時に近隣の避難誘導に走り出たので母と私と下の妹一人の四人で逃げました。我が家の近くにも小さな防空壕はあり、最初はそこへ飛び込んだのですが、「ここはアカン。海の方へ」といつ父の声で、安治川方面へ向かったのです。私は、当時五歳だった一番下の妹をおんぶし、病弱だった母の手を引きました。そして、その途中で目にしたいいくつもの悲惨な光景を、今も忘れることができません。

◆焼夷弾と機銃掃射の恐怖

最初に通りかかった菊水小学校の運動場には大きな防空壕があり、そこにはたくさんの人たちが避難していましたが、爆弾が焼夷弾の直撃を受けたらしく、中から誰かが「水々水」と叫びながら飛び出してきたのです。まだ三十代くらいの女性のようでした。服はボロボロ、顔は真っ黒、どこが口か分からないほどでしたが、母と二人で抱き起こして何とか水を飲ませてあげると、すぐに息を引き取られました。

少し行くと、今度は焼夷弾で燃え上がった家

から「助けてくれ」と物凄い叫び声が聞こえました。が、私たち自身が炎に追われている身で、どうしようもなく、そのまま走り続けました。さらに進むと、路上で焼夷弾が頭に刺さって即死し、倒れた身体が炎に包まれている五十代ぐらいの男の人も見ました。

そんな中で一番怖かったのは、パイロットの顔が見えるほどに屋根すれすれの低空で飛んでくる戦闘機に狙われた時でした。必死で走り続け、四人とも何とか機銃掃射の餌食になることは免れましたが、その時の恐怖はとも口にできません。今も夢に現われることがあり、そのたびに「戦争は絶対に嫌」と心底から思います。

◆思ひこめい恋め

そうしてようやく辿り着いたのは、安治川の浜に並んで建っていた肥タンゴ（便所）で、ひどく臭い所でした。最初は誰も逃げて来ていないので、「ここは危ないのか」と不安になりましたが、しばらくして逃げてくる人が段々と多くなったので、少し安心しました。

それでも町中の火災に照らされて何とも言

昭和二十年三月十三日の大阪大空襲での港区の光景を描いた体験者の絵。上は燃え盛る千代見町付近、下は空襲後の抱月町付近



えず不気味な空の下、しかも寒い寒い真夜中、出れば機銃掃射が待っています。皆で息をひそめ、ただ空襲が過ぎ去るのを待ちました。今思い返してもぞくぞくするほど恐ろしく、辛く、長い時間でした。

◆警報解除、雨に涙があふれて

やがて大きなサイレンと共に空襲警報が解除されると、どこからともなく「あー」といつかび声。むせび泣きのような声も聞こえました。私たちはもと来た道を引き返しました。ほとんどが裸足で、みな無言でした。足がひどく冷たかったのを覚えています。

その時、真つ暗な空から皆の肩へ、しとしとと雨が降り注いできたのです。「死ななくて良かった」という安堵、「なんでこんな目に遭わなければならぬの…」という情けなさ―そんなものが入り混じった、とても一口では表わせない感情がその雨に掻き立てられ、歩きながら涙がじわーっと溢れ出て止まりませんでした。

◆家族の無事に涙

幸い、そんな激しい空襲だったにもかかわらず、我が家は焼け残っていました。家の前で父が待っていました。炎と煙の中で近隣の火を消し、我が家の火の粉を払い、避難誘導の任務を果たし続けてきたためか、その目は兎のように真つ赤でした。皆の無事な顔を見ると、父は「良かった」とだけ言いました。その一言に父の思いが全部詰まっている、と私は思いました。その夜は皆で身体を寄せ合い、生きていた喜びに涙を流し続けました。時に父は四十過ぎ、母は四十前。言語に絶する危険の中、よくぞ子供たちを守り抜けたものだ、と心底から胸をなでおろしたのでしょう。

人のため生きぬく努力

命を救った医師の話『ふたつの勇気』

「いつから勉強してこんなお医者さんになりたい」（六年男子）「自分本位の生き方が奨励される中、人のために命をかける尊さを改めて教えられました」（四十代主婦）。

『ふたつの勇気』Ⅱ『写真Ⅱ』は「東日本大震災でたくさんの方を救った二人のお医者さんの話」として昨年夏の出版以来、港区でも子供だけでなく各世代に読まれ、反響を呼んでいます。

一〇一一年三月十一日午後 時四十八分。M九・〇の巨大な地震が起こり、東北地方沿岸に大津波が押し寄せました。この本に出てくる話は、この津波で孤立した宮城県石巻市立病院で本当に起こったことです。勇気をもって命がけで行動した医師、的確な判断で救助にあたった人々。たくさんの方を救ったそれらの行動は、今も私たちに教へてくれます。

文は児童作家の山本省三さん、絵は児童美術



術家の夏目尚吾さんが担当しましたが、話を聞かせてくれたのはヘリコプターで現場へ駆け付けた救急医・矢野賢一さん（当時四十歳）、この話に登場するもう一人は石巻市立病院の外科医・内山哲之さん（当時四十四歳）です。

このうち内山さんは津波で手術を中断し、二日目の朝、孤立した病院から五キロ先の市役所で、水の中を歩いて助けを求めました。その連絡を受けてドクターヘリで駆け付けたのが矢野さんで、彼は患者を病状に応じて三グループに分けるよう指示したり、応援のヘリを頼んで患者を別の病院へ移らせたり、次々と的確な判断を下しながら救助活動が続けました。そうして

四日目の朝、自衛隊の大型ヘリがやって来て病院の全スタッフを無事、安全な公園まで運んだのです。二人の勇気ある行動で四百を超える命が救われたといわれています。

この絵本ではつづいた経緯が、読みやすい文章と誠実なタッチの絵で再現され、当時の苛酷な状況と緊迫した空気が、その中で命をかけて奮闘した人たちの使命感や自己犠牲の気持ちが伝わってきて、胸を打ちます。

巻末には一人のプロフィールがあり、矢野さんについてはこの経験を通して「命を救う仕事の大切さを改めて感じている」と内山さんについては、転院した患者のためにその後も働き続け、震災から二年後の二年三月、過労で亡くなったことが、それぞれ記されています。また実際に地震や津波が起きたらどう行動すればいいかが「防災の知しき」としてイラスト入りで巻末に掲載されています。

株式会社教育出版発行。一三〇〇円＋税。港区ではオリオン書房（八幡屋 一六・一〇一、TEL・FAX六五七一・二二〇四）などで取り寄せてもらえます。

ミニ文化案内

●港図書館

①図書展示「あなたに」この本を！

展＝四月三十日(水)まで開催中。大阪市立図書館が購入した新刊本から図書館員おすすめの本を紹介②図書展示「身体を動かしてみませんかの本」展＝ラジオ体操やストレッチ、ウォーキングなど簡単にできる運動の本を展示。五月一日(木)～六月二十九日(日)③ミニ図書展示

「のりものだいすき」展＝乗り物をテーマにした子ども向けの本を展示。六月二十九日(日)まで開催中④子ども読書の日記念事業「春のこども会」＝四月二十九日(火祝)十時半～十一時半に港区民センター「随会議室」橋」で。出演は「絵本の会みなど」のメンバー。当日先着四十名⑤おたのしみ会＝毎週水曜十五時半～十六時、じゅつたんコーナーで。幼児を対象に、絵本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアター、手遊びなど。申込不要⑥あかちゃんのおたのしみ会＝毎月第一金曜日(五月は「日」の十一時～十一時半、じゅつたんコーナーで。赤ちゃんと保護者を対象に、赤ちゃんが絵本に親しめるよう工夫。申込不要◇☎六五七六・二三四六。

●関西フィルハーモニー管弦楽団『いずみホールシリーズvol.33』The Discovery

coverry 感動の系譜～古典からロマンへ～をテーマにクラシックの魅力を再発見する人気シリーズの三十三回目。今回は「巨匠デュメイのベートーヴェン」4」と題して同楽団音楽監督のオーギュスタン・デュメイさん指揮によるベートーヴェンとメンデルスゾーンを楽しむ。デュメイさんがヨーロッパで指導する新



→指揮を担当する関西フィルハーモニー管弦楽団音楽監督のオーギュスタン・デュメイさん

(©Thibault Daguzan)①と、

ヴァイオリン独奏を担当するリーヤ・ペトロ

ヴァさん②

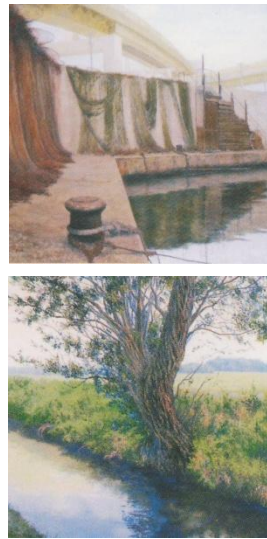
世代の旗手、リーヤ・ペトロヴァさんがメンデルスゾーンの超名曲で注目の日本デビュー。後半は「英雄」と「運命」に採られたベートーヴェンの峻厳なシンフォニーにデュメイさんが新鮮なアイディアで鋭く切り込み、オーケストラを美しく乱舞させる。演奏曲目は、①メンデルスゾーン：無言歌集より(弦楽合奏版)全五曲／アイヴィッド・フルター編曲「後悔」作品19・2

／「安らぎもなく」作品30・2／「やすらひ」作品30・4／「失われた幸福」作品38・2／「海辺で」作品53・1②メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲(本短調)作品64(ヴァイオリン独奏：リーヤ・ペトロヴァ)③ベートーヴェン：交響曲第4番(変ロ長調)作品60。五月五日(月祝)十五時からいずみホール(JR大阪環状線「大阪城公園」駅から徒歩約三分、同「京橋」駅南口から歩約八分、地下鉄長堀鶴見緑地線「大阪ビジネスパーク」駅から徒歩約五分)で。S席五千円、A席二千五百円(全席指定、消費税込。無料託児サービスあり(先着二十名、申込締切四月二十二日)。

☎六五七七・二三八一。

●竹の子二人展 平和の願いをキャンバスに

↑「竹の子二人展」に出品が予定されている作品から、村古高士さんの作品①と村古純子さんの作品②（いずれも部分）



初めて絵画人生を送ってきた八幡屋の川島恵美子さん（ハミ）から絵画を学ぶ人たちのグループ「芽の会」の会員である村古高士さん・純子さん夫妻による作品展示会。四月二十日（日）～二十七日（日）に画廊&アトリエ・ガレリア・リベリア（三先一・三二一八、地下鉄「朝潮橋駅」③）出口歩五分、みなと通沿い、☎七五〇二・四一八八で。十一～十八時開館。入場・鑑賞無料。

ひとくちPR

（二行＝税込二〇〇円）

●NPOみなと回ヶアセンター ①介護や老

いにまじわる相談に乗ります②介護を受けるた

めの手続きを代わりにやります③「デイサービス」は送り迎え付きで入浴・昼食・手芸・ゲームなどを楽します④訪問介護は買物・掃除・洗濯・通院などのお手伝いをします。☎八五八三・四八八〇、FAX八五八三・二二二一。

●あなたのがんが生まれ変わります！ 綿毛

羽毛も掛も敷も、熟練職人が心込めて仕立て替え。シングル掛（敷）ふとん一万円。ふとん館

ひらのや（南田岡二一・一八 繁栄商店街東入口）フリーダイヤル〇二一〇・四二四九・五五。

●レンタルフリーボックス 一カ月二〇〇

一八〇〇円。鍵付きガラスケース、棚上陳列スペース、ハンガー、足元置きカゴなどの月極レンタルも。「スメハウス ナナイロ」（南田岡二

二・九 繁栄商店街内）☎八五八六・一五五。

●放課後・春夏冬休みは学童保育へ 入所児童募集。指導員が安全・健全・家族的に遊びや遊びを指導。体験可。☎八五七五・〇三三五ありんこ。

●ボクササイズでシェイプアップ！ 女性も

小・中・高生も楽しく練習。親切指導。家族的雰囲気。月会費五千円（無期限十枚つづりチケット五千円）。入会金二万円を一回半額。練習日

は月・水・金の十九時半～二十時半。港ホクシングジムは三先一・三三・九（地下鉄朝潮橋駅南側の歩道橋すべの裏通り）。

●マナビ・スクール 繁栄商店街 チーム学習に

よって全員ができる。をめざす新学習法。小一～高二。月謝は週一回で実質六千円。NPO

が運営。問合せはメールで（info.ubiquitous.adv@gmail.com）。

●何でも書きます、まじめです 手紙・案内・

報告・宣伝・司会等の文案。自分史・社史・団体史等の聞き書き。新聞・広報・書籍・会報等の取材・編集。☎八五七二・四八三六 港新聞・

飯田編集事務所。

読者プレゼント

※いずれもハガキに今月号の感想とプレゼント名を書いて20日必着で港新聞へ。

●関西フィル「いそみホールシリーズ」(三

二文化案内)招待券をへア1組に。

●『ふたつの翼』(図書ガイド)を1名様。

●あながいおまる一座『綾羽一紀の世界』(演劇ガイド)招待券をへア2組に。